

市長の伊賀じまん

—西嶋八兵衛と伊賀のため池—



伊賀は、昔から雨が少なく干害に悩まされてきた土地でした。農業生産には水が欠かせないことから、水不足を防ぐためにそれぞれの地域にため池が作られ、今でも市内に数多く残っています。

最近、南海トラフ巨大地震が起こった際のため池の耐震性を心配される人が多くいらっしゃると思います。市では、災害でため池が決壊した場合に予想される浸水区域と到達時間を表した「ため池ハザードマップ」を作成するなど、皆さんの安全確保に取り組んでいます。

ため池といえば、江戸時代前期に西嶋八兵衛という藩士が伊賀にいました。伊賀信楽古陶館の玄関脇には「西嶋八兵衛屋敷跡」という石碑が建てられており、かつてこの伊賀の地で彼が暮らしていたことを伝えています。

西嶋八兵衛は、藤堂藩によって讃岐国（現在の香川県）に派遣され、日本最古のため池である満濃池の修築や栗林公園の設計などを行いました。以前、



▲干害対策として昭和29年に築造された鴉山池（柘植町）

◀西嶋八兵衛屋敷跡の石碑

私が栗林公園を訪れた際に、伊賀から来たということをお伝えすると、「西嶋八兵衛さんゆかりの土地ですね。」と大変喜んでいただき、香川県で西嶋八兵衛がいに評価の高い人物であるかを実感しました。

伊賀では、藤堂高虎によって日本有数の高石垣が築かれるなど、古くから優れた土木技術があり、その中で、農業に転用できる技術が西嶋八兵衛によって養われ、山畑の新田開発などが行われてきました。ため池と聞くと、今となつては単に水を溜めるための池だと思いがちですが、ため池には先人たちの思いや技術が隠されています。

西嶋八兵衛は市外でも高い評価を受けており、伊賀市にとって誇るべき人物の1人です。今後はこのような事績をさらに顕彰していくべきだと思います。

先人の思いを大切に、のちに続く私たちが「誇れる伊賀、選ばれる伊賀」を作っていくかなければなりません。

（伊賀市長 岡本 栄）

伊賀国分寺あれこれ

市史編さんだより (46)

国分寺とは、天平13年（741）に聖武天皇の発願によって全国に1カ所ずつ建てられた寺院のことで、伊賀国の国分寺は、伊賀市文化会館の北西側、西明寺字長者屋敷にありました。

伊賀国分寺跡は、東西約220m、南北約260mの土塁（土手）に囲まれた中に、塔や金堂、中門などの建物跡を見ることが出来ます。全国でも全体像を知ることが出来る数少ない国分寺跡として、隣接する長楽山廃寺（国分尼寺跡）とともに国史跡に指定されています。

平安時代の「貞信公記抄」という史料には、天曆2年（948）2月、伊賀国から国分寺の毘沙門天・金剛力士などが震え鳴り響いたとの知らせが都に届けられたとあります。毘沙門天とは、仏教を護持する四天王の一人、多聞天のことで、金剛力士も仏教の守護神です。伊賀国分寺にも、かつては東大寺南大門にあるような金剛力士像があったことが分かれます。

また、平安時代末期の保安2年（1121）の東大寺文書のなかに、「国分寺講師布施料」「国分寺春季仁王会僧経範布施拾束」という国分寺の経費に関する史料があります。「講師」とは、法会を営む際の僧侶、

「仁王会」とは、天下泰平や鎮護国家を祈願するために仁王経という經典を誦誦する法会です。8世紀後半に建立された伊賀国分寺では、12世紀初めまで法会が営まれ、寺院として機能していたことがわかります。

200m四方を超える広大な伊賀国分寺は、いつしか寺院であったことが忘れ去られ、長者の屋敷跡と語られるようになり、江戸時代初期の『茅栗草子』に「日の丸長者」の伝説が書き留められるようになりました。戦時中は海軍の飛行場の一部となり、飛行機を空襲から守る掩体壕が造られました。現在の伊賀国分寺跡は、歩道が整備され、木立の中を散策することが出来ます。

今年11月、本市で「全国国分寺サミット」が開催されます。皆さんもぜひ伊賀国分寺跡を訪れ、身近な歴史に触れてみてはいかがでしょうか。



▲伊賀国分寺跡

総務課市史編さん係
☎ 52・4380 FAX 52・4381